PRESS RELEASE

泉屋博古館東京 SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM TOKYO

企画展 歌と物語の絵
― 雅やかなやまと絵の世界

Thematic Exhibition

Lyrical and Narrative Paintings —The Elegant World of Yamato-e

同時開催：特集展示「没後100年記念　黒田清輝と住友」

《展覧会概要》

古来、語り読み継がれてきた物語は、古くから絵巻物など絵画と深い関係にありました。和歌もまた、三十一文字の世界が絵画化されたり、絵から受けた感興から歌が詠まれたりと、絵画との相互の刺激から表現が高められてきました。

物語絵や歌絵の特徴のひとつは、精細な描写と典雅な色彩。宮廷や社寺の一級の絵師が貴人の美意識に寄り添い追求した「やまと絵」の様式を継承することでしょう。そしてストーリーに流れる時間を表すかのような巻物、特別な場面を抽出してドラマティックに描き出す屏風など、長大な画面にさまざまな表現が生まれました。

古典文学は、後世の人々が自身に引き寄せて味わうことで、読み継がれ輝き続けてきました。それに基づく絵画もまた同様です。本展では、近世の人々の気分を映し出す物語絵と歌絵を、館蔵の住友コレクションから選りすぐってご紹介します。雅やかで華麗、時にちょっとユーモラスな世界をお楽しみ下さい。

また特集展示として、黒田清輝の没後100年を記念し、住友家須磨別邸とともに焼失した黒田の代表作《昔語り》について、下絵や画稿、そしてふたりの書簡から紹介します。

《本展のみどころ》

1．住友コレクションのやまと絵を一挙公開。

当館が所蔵する住友家歴代収集の日本絵画には、繊細な描写と典雅な色彩を特徴とする絵巻・屏風の作品群が含まれます。それは、平安時代より培われてきたやまと絵の領域が一気にひろがった桃山から江戸時代前期（17世紀頃）のものです。かつて一部の貴人のためだったやまと絵は、より広い階層にむけて一段と親しみやすく視覚効果の高いものへ生まれ変わっていったのです。

2．知っているようで知らない古典文学。江戸時代の親しみやすい絵画を通じて、一歩近づく。

江戸時代の人たちだって、みなが全編読破していたとも限りません。挿絵入りのダイジェストやパロディ本も人気がありました。屏風や掛軸には特に印象的な名場面が選ばれ、その時代ならではの好みや解釈も反映されています。それらに親しむうちに、いつのまにか文学の根底にある普遍的な人生の機微に引き寄せられていく――古典文学が読み継がれてきた理由はそのあたりにあるのでしょう。

3．細部こそ見せ場！高精細画像で心情・風情に迫る。

絵巻は手元で、屏風は座敷で、ともに間近に鑑賞されたやまと絵は、細密な描写こそ本領ともいえるでしょう。
文化財用高精細スキャナーで撮影した3点の物語絵屏風の拡大画像を会場にご用意します。ガラス越しでは見つけにくい表情や仕草、四季折々の自然など、ひとたび目にすれば古典文学にぐっと近づけることでしょう。

《基本情報》

展覧会名	企画展　歌と物語の絵　―雅やかなやまと絵の世界 同時開催　特集展示「没後100年記念　黒田清輝と住友」
会　　期	2024年6月1日(土)～7月21日(日)　＊会期中展示替えあり
開館時間	11:00～18:00　※金曜日は19:00まで開館　※入館は閉館の30分前まで
休 館 日	月曜日、7/16（火）（7/15は開館）
入 館 料	一般1,000円(800円)、高大生600円(500円)、中学生以下無料 ※20名様以上の団体は()内の割引料金　※障がい者手帳等ご呈示の方はご本人および同伴者１名まで無料
会　　場	泉屋博古館東京　〒106-0032　東京都港区六本木1-5-1 https://sen-oku.or.jp/tokyo/　TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル)
主　　催	公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社

《展示構成》（予定）

1．うたうたう絵

和歌とは、人の心に去来した感興を三十一文字のことばに託して表すものです。そこに欠かせないのが、日本の四季折々の自然や人々の営みでした。そして平安時代中頃、和歌の隆盛とともに広がったのが「歌絵」です。それは歌の意味や内容からイメージされ、また詠まれた景物を素材として描かれたものです。反対に、描かれた景物に触発されて歌が詠まれることもありました。「歌から絵へ」「絵から歌へ」――無限の連鎖のなかから新たな芸術は生まれていったのです。

「掛詞」や「見立て」、「本歌取り」など、限られたことばを起点に鑑賞者の知識や想像の力も借りて最大限の表現にいたる技が和歌には満ちています。歌絵もまた、シンプルなモチーフ、機知に富む構図によって、古来の言語・造形の積層を紐解き自由にイメージを重ね広げる余地を観る者に与えています。ストイックで思わせぶりな象徴性こそ、歌絵のひとつの魅力なのです。

さて、いにしえの画家たちからの一投を受け、私たちはその絵に何を思い詠うでしょうか。

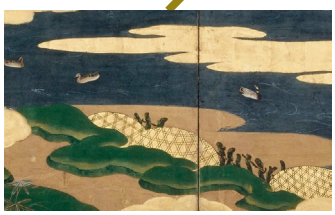
◇屏風にひろがる歌枕のイメージ

歌枕とは古来、和歌で繰り返し詠まれた地名のこと。実際の景観よりも、数々の和歌のなかで培われたイメージが重視され、名所絵もまたその観念的な世界を描くものでした。

今回展示する《柳橋柴舟図屏風（りゅうきょうしばふねずびょうぶ）》はそういった歌絵の典型例です。

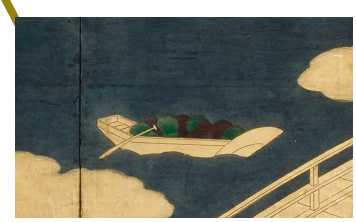
どこにも人が描かれていない！
実在の地でありながら、和歌で詠まれたイメージの中の空想の地としてとらえ、観る人の想像が羽ばたくよう、あえて人を描いていないのです。

《柳橋柴舟図屏風》
江戸・17世紀　泉屋博古館



蛇籠と網代木
蛇籠は、竹を編んで石を詰め水を防ぐ装置。網代木は魚をとる網を固定する杭

水車



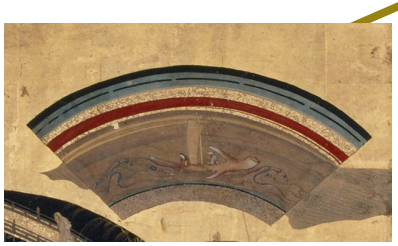
柴舟といえば宇治！
柴を刈りだして出荷する舟

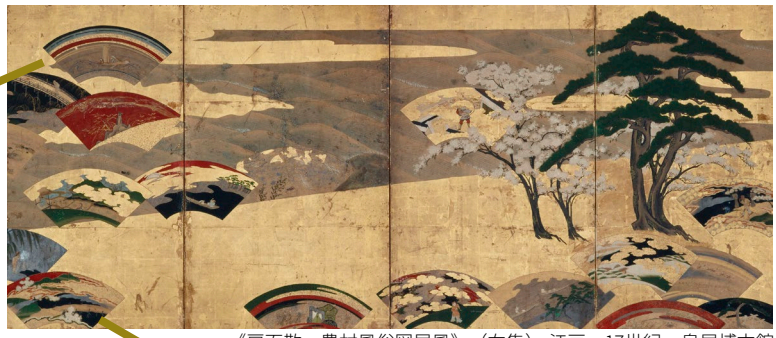
向こう岸に山並みを望む大きな川の流れ、そこにかかる金色の橋。この見渡すような雄大な風景は一般的な川を表すようですが、「川、橋、山に、柴舟、網代木（杭）」と見れば、古来、宇治が連想されました。京都から少し離れた宇治の山里は、古代より寺社がたたずみ、貴族の別荘が営まれました。そこに橋姫の伝説や源平合戦の逸話、さらには「うじ＝憂し」といった地名の響きからの連想まで折り重なって、名所歌枕としての「宇治」のイメージが形成されました。この屏風に描かれているのもそういったイメージの景色です。一見どこでもない普遍的な景観ですが、いにしえの人は瞬時に宇治を想起し、数々の名歌からさらに想像をふくらませたことでしょう。

◇扇に描かれた和歌――機知に富む解釈、大胆なデザイン

身近に携帯し、時に贈答にも用いられる扇は、小画面ながらもそれぞれにひとつの世界が成立しています。和歌の感動をそのまま絵画化するもの、言葉遊びでわざと意味をすり替えて奇想天外な光景を描くもの。それぞれの小宇宙が、屏風の桜咲く水辺にちりばめられています。

近寄っては機知に富む歌絵を楽しみ、引いては華麗にデザインされた空間を楽しむ――扇面散屏風（せんめんちらし）の楽しみは尽きません。





《扇面散・農村風俗図屏風》（右隻） 江戸・17世紀　泉屋博古館

山高み雲井に見ゆる桜花
心のゆきて折らぬ日ぞなき
凡河内躬恒（古今集）

名歌の情景を華麗に

高嶺に咲き誇る桜花に憧れる気持ちを詠んだ和歌。遠く雲間に山々と桜が見え隠れする雄大な風景を鮮やかに表します。

風もなし雲のけしきも良かりけり
かのつの舟の出てやするらん
詠み人しらず

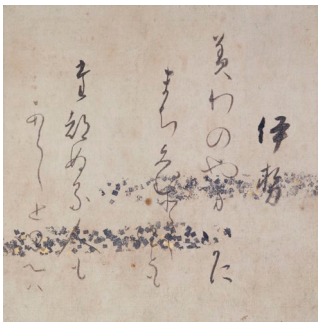
だじゃれ的解釈から広がるシュールな世界

和歌のなかの一句「かのつの舟」。普通なら「彼の（あの）津の舟」とみるところを、おなじ発音の「鹿の角舟」にすり替えています。その結果、描かれたのは鹿の角に乗って浮かぶ小さな人間。それとも鹿の角が巨大なの？

◇神か人か――三十六歌仙の絵すがた

「歌仙」とは歌の神様。古代の和歌の名手を尊崇して称することばで、「三十六歌仙」は平安時代中期に藤原公任がそれ以前の歌人を選んだものとされます。本来、威儀をただした神聖な姿で描かれた歌仙ですが、中世以降、より自由な表現がひろがりました。

江戸初期の文化人、松花堂昭乗（しょうかどうしょうじょう）（1582-1639）による《三十六歌仙書画帖》でも、歌作りに悩んだり、色目をつかったりする人間くさい歌仙が描かれます。寛永の三筆の一人に数えられた松花堂の流麗な書の和歌はそれぞれの歌人の代表歌。あわせて鑑賞すれば味わいもひとしおです。



《三十六歌仙書画帖》（伊勢）松花堂昭乗
江戸・元和2年（1616）泉屋博古館
前期展示（6/1-6/23）

同・柿本人麻呂
後期展示（6/25-7/21）

2. ものかたる絵

物語は元来、「語り」のことばどおり、音読を聞くことが中心だったといい、巻物などに描かれた絵を前にして「耳」と「目」で味わう楽しみが早い時期からありました。やがて、ことば、書、絵からなる総合芸術に昇華した絵巻物から、冊子、扇、掛物、屏風へと、「物語絵」は広がります。

とりわけ中世末から近世にかけての物語絵屏風は、大画面の特長を生かした装飾的で視覚効果の高い新たな世界を開きます。物語の各場面を一覧するものから、次第に場面数をしぼり、ひとつの場面を詳しくドラマティックに描く方向へと展開しました。そこでは、場面選択や表現に当時の鑑賞者の好みや心情が映し出され、また新興の画派たちの創意が注ぎ込まれることとなります。観る側の想像の余地をのこした古代中世の引目鉤鼻から、表情豊かな個性的表現へ――それを可能にするのも、長く読み継がれる古典文学のもつ普遍性のなせるわざでしょう。

目を凝らして登場人物になった気分で物語の世界に没入するのも一興です。

◇絵巻―ことばと絵でつむぐ物語

古来、語り読み継がれてきた物語は、古くから絵巻物など絵画と深い関係にありました。「語り」のことばどおり、物語文学は当初、音読して聞かせることが中心だったともいわれます。巻物に描かれた絵をみながら、耳と目でその世界を味わっていたのでしょう。

多くの場合、詞書と絵が交互に現れる絵巻物は、作り手ではなく、受け取る側の巻き広げるという動作が加わってはじめて物語が展開します。時には読み手や鑑賞者の心情にあわせ、緩急自在に物語が進行したことでしょう。

本展では、中世の宮廷絵師による活気ある説話絵巻《是害房絵巻（ぜがいぼう）》（重文）と、日本最古の物語を題材とする江戸時代の華麗な《竹取物語絵巻》という対照的な絵巻をみることができます。

《是害房絵巻》(部分)
南北朝・14世紀
重要文化財　泉屋博古館

唐土からやってきた天狗の是害房が比叡山で大暴れ！けれども高僧の法力を前にあえなく敗れた是害房を日本の天狗が緊急搬送中。詞書だけでなく、マンガの吹き出しのようにそれぞれの台詞が書き添えられています。口々に嫌みを言いつつも、日本の天狗たちは面倒見がよいようです。
宮廷絵師による的確な画技で、空想上の烏天狗の活躍がユーモラスに表現されています。

《竹取物語絵巻》（部分）
江戸・17世紀　泉屋博古館

日本最古の物語とされる竹取物語。竹取の翁のもとで美しく成長したかぐや姫の無理難題に危険を冒す求婚者たち。しかし最後には月世界から迎えがやってきます。
上質な絵具、惜しみなく用いられる金砂子。作者は不明ながら豪奢な絵巻は大名家の婚礼道具などとして制作された可能性があります。

◇三大物語屏風　伊勢／源氏／平家－－人気の名場面集

平安時代から鎌倉時代にかけて多く生まれた王朝物語や合戦物語のなかでも名作として特に近世に人気のあった三つの物語。この時代には名場面を選んでバランス良く構成したり、画面いっぱいにクライマックスを描き出すなど、屏風という大画面の特徴を生かした視覚効果の高い物語絵が多く生まれました。

この時代に活躍した画派は、創意を尽くして優れた物語絵屏風を遺しています。当館には、画題はもちろん、画派も構成も異なる三作例がそろっています。三者三様のアプローチを比較しながらご覧ください。

《伊勢物語図屏風》江戸・17世紀　泉屋博古館

《平家物語・大原御幸図屏風》
桃山・16世紀　泉屋博古館

◇心なしか、俗っぽい源氏物語絵

《源氏物語図屏風》では、『源氏物語』五十四帖のうち「桐壺」「若紫」「紅葉賀」「絵合」「葵」「胡蝶」など12場面を金雲で区切って描いています。その配置は物語の流れには必ずしもそわず、むしろ季節や内容など、画面全体として見たときのバランスに配慮されています。

細部の描写も時として原文に忠実とは言い難いものの、形式的に表現されがちな古典文学の登場人物を生身の人間としてとらえているようです。時として野卑な表情をみせる人物描写といい、車争いの迫力ある乱闘シーンといい、この画家が本来、風俗画を得意としたことが想像されます。

窃視（垣間見）や盛大な行事など通俗的な関心をそそる場面が主に選択されていることも同様です。

その描写は江戸初期の風俗画の名手岩佐又兵衛（1578-1650）に近く、又兵衛晩年の工房作と目されています。この源氏絵も、この時代の好みに応えた結果といえるかも知れません。

《源氏物語図屏風》江戸・17世紀　泉屋博古館

～葵～

賀茂祭の見物で賑わう大路。六条御息所の車を葵の上の一行が押しのける。物語中の数少ない荒々しい場面、ここぞとばかりに画家も力を入れたようで、大乱闘になってしまいました。
本来隠されるべき高貴な六条御息所の姿を牛車からのぞかせるあたりは、サービス精神も過剰というべきかもしれません。

～若紫～

北山の僧庵で雀を追う少女を垣間見る光源氏。
少女は成長して源氏と結ばれる。
運命の出会いの場面では貴公子もクールではいられないようです。

3. れきし画

明治時代には洋画・日本画を問わず、日本の歴史・神話・仏教主題・伝説を描く「歴史画」が流行しました。画家たちは歴史を正しくかつリアルに伝えるため、時代考証を究め、時に西洋画の写実技法を駆使して迫真的に描き出すことに腐心しました。岡倉覚三（天心）が、「歴史画は国体思想の発達に随て益々振興すべきものなり」と奨励したように、歴史画は近代国家の形成において必要とされ、国家意識の高まりや西洋絵画における「歴史画」概念の輸入を受けて盛んに描かれるようになります。視覚的に国家の歴史を表す歴史画は、単なる歴史の記録にとどまらず、歴史意識の共有や国民の道徳心を養うために求められたのです。

大正以降の歴史画は、ナラティブ要素が希薄になる一方で、キャラクターが独り立ちして、普遍的なテーマの語り部として描かれるようになります。作者の思想を絵画に盛り込むことが求められた近代絵画において、歴史画はそういった抽象概念を可視化する最も適した画題でした。もはやストーリーは置き去りに、作者の主張を仮託する乗り物と化した「物語絵」の向こうには、何が見えるでしょうか。

原田西湖　《乾坤再明》
明治36年（1903）泉屋博古館東京
前期展示（6/1-6/23）

特集展示「没後100年記念　黒田清輝と住友」

日本近代洋画の発展に力を尽くした黒田清輝（1866〜1924）は、フランス留学から帰国して間もなく、当地で親交を結んだ西園寺公望を通じて、住友家第15代当主・住友吉左衛門友純（1864〜1926、号春翠）の知遇を得ました。春翠は、明治28年（1895）に実兄である西園寺の仲介により、裸体画論争で槍玉にあげられた《朝妝》（焼失）を購入しました。その後も春翠は黒田に潤筆料を援助するなど、制作活動を支援しています。

その黒田は明治26年（1893）に初めて京都を訪れ、『平家物語』の悲恋で知られる清閑寺を訪ねています。黒田は同寺の由来である高倉天皇と小督の物語を聞いた際に、昔がよみがえってくるような不思議な体験をしたと後年回想しています。この時の体験をもとに着想した《昔語り》（焼失）は、フランスで学んだ本格的な構想画を日本へと持ち込もうとした意欲作でした。本作は、須磨海岸に建てられた住友家の別邸に長らく飾られていましたが、昭和20年（1945）の空襲で焼失しました。

黒田清輝の没後100年を迎えるこの機会に、須磨別邸とともに焼失した黒田の代表作《昔語り》をその下絵や画稿から紹介し、ふたりの交流を書簡から辿ります。

黒田清輝
《「昔語り」下絵（舞妓）》
1896年　東京国立博物館
出典：ColBase (https://colbase.nich.go.jp)

《貸出可能画像・キャプション一覧》

※屏風片隻使用時は（右隻）（左隻）
部分図使用時は（部分）の表記をお願いします

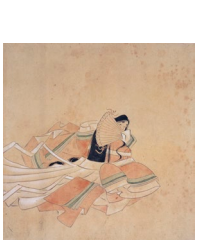
《源氏物語図屏風》
江戸・17世紀
泉屋博古館

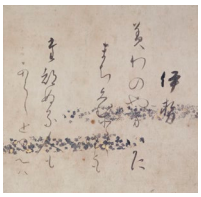
《伊勢物語図屏風》
江戸・17世紀
泉屋博古館

《平家物語・大原御幸図屏風》
桃山・16世紀
泉屋博古館

《竹取物語絵巻》(部分)
江戸・17世紀
泉屋博古館

《是害房絵巻》(部分)
南北朝・14世紀
重要文化財
泉屋博古館

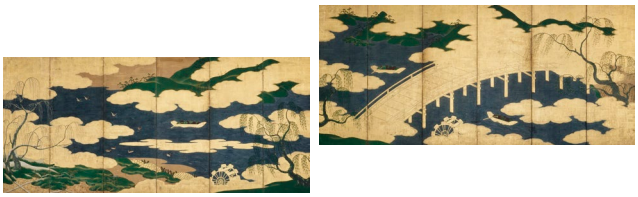




《三十六歌仙書画帖》
松花堂昭乗
江戸・元和2年（1616）
泉屋博古館

左：伊勢
前期展示（6/1-6/23）
右：柿本人麻呂
後期展示（6/25-7/21）

《扇面散・農村風俗図屏風》（右隻）
江戸・17世紀
泉屋博古館



（柳橋柴舟図屏風》
江戸・17世紀
泉屋博古館

原田西湖　《乾坤再明》
明治36年（1903）
泉屋博古館東京
前期展示（6/1-6/23）

プレス専用 広報用ダウンロードシステム　https://www.artpr.jp/senoku-tokyo ▶▶▶

※初回のみ新規ご登録が必要です。

《お問い合わせ先》 泉屋博古館東京　広報担当：橋本旦子　展覧会担当：実方葉子（泉屋博古館 学芸部長）
TEL: 03-3584-8136　FAX: 03-3584-8137　E-mail : pr-tokyo@sen-oku.or.jp